

アサバスカンインディアン と ユピックエスキモー

今から約10万年ほど前の氷河期最盛期のアラスカにはマンモス等31種類の哺乳類が群れていたといわれている。シベリアとアラスカを隔てているベーリング海は過去2回地続きになった歴史をもつ。今から約36000年前と32000年前である。この時期にマンモス、カリブー、渡り鳥等を狙ってシベリアからアメリカ大陸へとやってきた人々が最初の入植者だったのである。

アラスカ地域に定住した狩猟民達は巨大な氷河に阻まれて南へと移動することはできなかったが、約13000年前ごろに始まった地球の温暖化によって氷河が解け始めると、アメリカ大陸全土へと広がって行った。

エスキモーは再び海が出現した約3000年前に船にのってやってきた比較的新しい民族と言われている。彼らは極北の苛酷な自然に適應して独自の文化を形成した。アラスカに定住した民族はエスキモー、アリュート、アサバスカン・インディアン、クリンケット・インディアン、ハイダ・インディアン、チムシャン・インディアンであるが、我々はとくにユピックエスキモー、アサバスカンインディアンと多く交流した。

ユーコン河の出発地カークロスから国境を越えてすぐの村イーグルまでの約1000kmの間いわゆるインディアンといわれる人達との交流はなかった。出会う人々のほとんどが白人であったし、村自体本当にインディアン達が住んでいるのだろうかという疑問さえわいた。しかし、サークル以後河口まで我々は様々な形でインディアンやエスキモー達と出会うことになる。

私の持つイメージはインディアンは山に分け入って鹿や熊などを狩って生計を立て、エスキモーは海のそばでアザラシや鯨を捕って生活をしているといったものであったがユーコン河沿岸で暮らす人々に関してはインディアンもエスキモーも生活様式はほぼ似たものであった。ユーコンが解氷する夏には、海から上ってくるサーモンを捕まえて夏や冬の食糧にしたり観光地の御土産屋におろしたりする。9月にはハンティングが数週間解禁され銃を持った男達がモーターボートに乗り込み泊まりがけでムース（ヘラ鹿）を狩りにいく。解禁日は州の法律で決められているのである。これは他の州からハンター達が入ってくるのを制限するためであろうか。しかし、このためユーコン周辺の人々の生活スタイルがどんどん画一化されていっているのではないだろうか。

だが、ハンティングシーズンを制限したりサーモン漁をネイティブだけの特権にしても実質私が見た限りではそれほど意味も必要もない様な気がする。なぜなら、グロッサリーストアには手軽で豊富な食糧があり絶えずバージという食糧運搬船が物資を補給にくるからである。あるフィッシュキャンプで冬の食糧はどうするのかと聞いたら、乾燥させたサーモンとグロッサリーで買った食糧を食べると言っていた。また冬期は内陸の街に戻って過ごすらしい。

エスキモーは比較的遅くにアラスカにわたって来たと前述したが、その名は「生肉を食べる人」という意味でインディアンに付けられたと言われている。だからカナダのエスキモーはそう呼ばれることを好まず、イヌビクと呼ばれることを望んでいると本に書いてあったがユーコンで会った人はそんなことは気にせず、自らをエスキモーとって嫌がっている様子ではなかった。

ただアサバスカンとエスキモーの関係は微妙である。あるアサバスカンはエスキモーのことを「狂った奴」といっていたし、エスキモーの方ではアサバスカンについて「マタガフカン」と揶揄する様に喋る人もいた。しかし、他種族同士で結婚している夫婦もいるので一概に良い悪いとはいえないと思う。

河口付近に暮らすエスキモーの人々の顔は日本人そっくりで表情の作り方や身振りから感じる親しみは正しく我々と同質のものである。彼らの文化や暮らしについて何一つとして断定的に語れるものはないが、彼らがベーリング海を渡ってアラスカにやって来た、そしてその祖先が我々日本人の祖先と同じであるという説についてだけは胸を張って間違いないといえる。